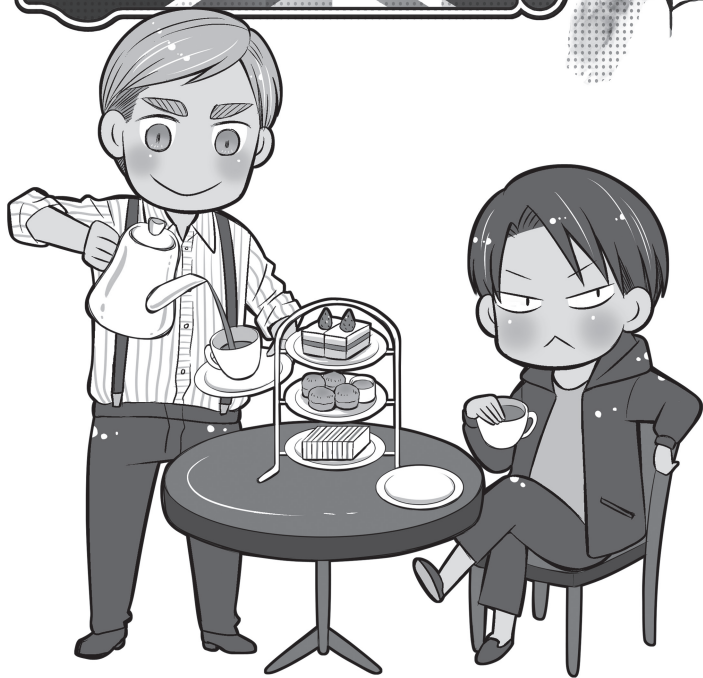


Yankee Goes To

DO YOU BELIEVE IN GHOSTS?

London!



MIND THE GAP

dgate
East

Tower
Gateway



The Characters.

— 登場人物 —

Yankee Goes To London!

★ エルビン・スミス — Erwin Smith —

マサチューセッツ州ボストンの出身。金髪碧眼に均整の取れた体躯を持つ“完璧”なアングロ・サクソン系アメリカ人。幼少期に母親を病で吊って以来、地元の公立校で教鞭を執る父親に男手一つで育てられる。小学校に入学した年、SFフリークの担任が振るう熱弁に勧められるまま、幼馴染と観た映画をきっかけに“騎士”が活躍する物語に興味を持つ。

成長するに従い、次第に興味の対象がライトセーバーからエクスカリバーへと転換し、遂には“神話”に傾倒し今に至る。

発端となった映画を制作した監督のインタビュー記事を読んで以来、心の師と仰ぐ神話学の権威が女子大で教鞭を取っている事実を知り一時は落胆するも、若き頃の彼がコロンビア大学で学んでいた事から、すぐさま意識を切り替え志望校に定めた。

隣人であり同じ年に生まれたドーク家の長男ナイルとは、物心が付く以前からの腐れ縁が続いており、大学時代はルームメイトでもあった。学士号取得後、志望していた金融業界に早々と就職したナイルがロンドン支店に飛ばされた後も、チャットやスカイプを通じ連絡を取り合っている。

意気揚々と大学院に進学したものの、人文学系の奨学金枠の少なさに啞然とし、休学しては学費を貯め大学へ舞い戻る自転車操業に四年を費やし苦勞の末修士号を取得した。

博士課程に進み研究者としての道を極めることを望むも、研究テーマの殆どが欧州を起源とすることから現状に限界を感じ留学を視野に入れるようになる。取り分け、第一志望であるイギリスの大学の奨学生募集には片っ端から応募していた。

その執念が遂に実り、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジへの留学が決まる。先に赴任していたナイルから、祝い代わり

に誘われ参加した“幽霊ツアー”が縁でリヴァイと知り合う。

★ リヴァイ・アッカーマン — Levi Ackerman —

ケルト系スコット人を起源に持ち、代々特殊な能力を司るアッカーマン家に生まれる。本宅はスコットランドのエディンバラにあるが、家族の殆どはロンドン中心部のセント・ジョンズウッドに建つ通称“アッカーマン荘”で暮らしている。

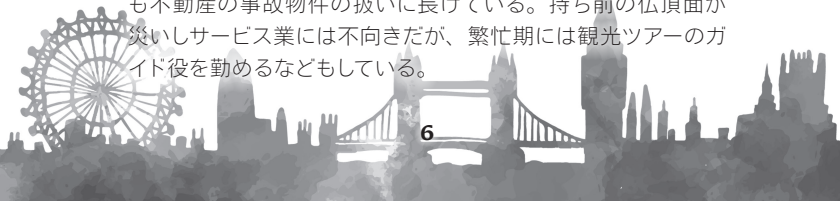
表向きの家業は“不動産及びサービス業”で、不動産の売買と賃貸を主軸に、B&Bやレストラン・パブを経営する一方“幽霊ツアー”に代表される市内観光の企画運営を行っているが、本業はマーシア家のオファがイングランド王を名乗る以前から“除霊と浄霊”を執り行う呪術師の一族であり王家とも縁がある。祖父と母親、両者の特質を余すこと無く受け継ぎ、幽霊や生霊など霊的な者の存在を感知出来るだけでなく“話せる”“殴れる”“除霊も浄化もOK”と三拍子揃い踏み。物理的な除霊しか出来ない上に、親戚一同から愚迷と称される伯父ケニーを差し置き、一族期待の後継者とされている。

幼少期より道を歩けば幽霊と出会う体質から、家業を継ぐ事に関しては然したる疑問を抱いていない。

“霊を知るには歴史を学べ”と宣う祖父の持論から、単に“自宅の近所”と言う身も蓋もない理由でロンドン大学ユニバーシティ・カレッジにある歴史科学部を進学先に選んだ。

同郷のザガリアス家とは高祖父の代より前から親しい間柄であり、同じ年に生まれた同家の長子ミケとは幼児期より家族同然の間柄として育つ。二人の身長差から陰で凸凹コンビと呼ばれているが、本人たちは特には気にしていないようだ。

中等教育に進んだ頃から学業の傍ら家業を手伝っており、中でも不動産の事故物件の扱いに長けている。持ち前の仏頂面が災いしサービス業には不向きだが、繁忙期には観光ツアーのガイド役を勤めるなどもしている。



Yankee Goes To London!

★ アッカーマン卿 — Sir Ackerman —

リヴァイの祖父でありアッカーマン家の現当主。公式に爵位を持たないものの、その特殊な能力から代々歴代の王侯貴族より尊崇を集め、現在も枢要な役割を担っている。

リヴァイの老後を容易に想像させる程面差しが似ており、その所為もあってか、孫である彼に対しては他の身内と比べても五割増以上甘い。クシュルが引き取ったミカサを何とか気に掛け、実の孫同然に可愛がり、自ら率先して教育係を買って出ている。常日頃家長らしく威厳を持って振る舞うが、リヴァイ十歳の誕生日の折など、ミケと二人プレゼントと称しケニーから与えられたテレビゲームに興じていた時など、ゲームの内容が“勇者と魔物の戦い”と聴き及び、自宅の居間に突如ワルキューレとヴァルハラを顕現させるなど傍迷惑で御茶目な一面もある。

★ クシュル・アッカーマン — Kuchel Ackerman —

リヴァイの母にして別名“憑依の女王”。霊的なモノに対し物理ではなく説得で浄霊する事に長けている。

ウィジャボードの名手で、貴族や裕福層が秘密裏に催す降霊会では引く手数多の売れっ子であり、現状アッカーマン家の本業では兄を凌ぐ稼ぎ頭となっている。

大学在籍時に日本から来た留学生と恋仲になるも、彼女に向けられた呪詛を察し、身代わりとして盾となり散ってしまった。その直後に妊娠が発覚。一人で産み育てる決意を固めるが、父親の後押しもあり親子共々実家で暮らす事となった。以来結界に関し独自の研究を重ね、父親をも凌ぐ守備力を手に入れる。

亡き恋人とは、今もウィジャボードを介し会話を楽しんでおり、周囲の心配を余所に新たな恋が芽生える気配はない。

★ ケニー・アッカーマン — Kenny Ackerman —

クシュルの兄でアッカーマン家現当主の長子だが後継者候補からは既に外されている。幼少期は“やんちゃ”の一言で済んだ性格も成長に従い“破天荒”へとエスカレートし、遂には大学進学目前のギャップ・イヤーに“見聞を広める”との大義を掲げ旅に出るも、見事にそのまま音信不通となった。

何処で聞き付けたのか妹の出産を知りロンドンに舞い戻って来たものの、父親の逆鱗に触れ“アッカーマン荘”への出入りを禁じられた。十年以上経てもなお、その禁は解かれていない。流石に無職のまま野放しにする事だけは一族も避けたかったのか、経営する飲食店の中から“幽霊パブ”を任せられ今に至る。霊に対しては専ら物理攻撃に特化。幼い頃のリヴァイに幽霊の“殴り方”と“蹴り方”を教えた張本人。

★ ミカサ・アッカーマン — Mikasa Ackerman —

父親がアッカーマン一族の傍系に当たり、日本人の母親と親子三人ドイツで暮らしていたが、交通事故によりある日突然両親が他界してしまう。

引き取り手が現れず孤児院へ送られる寸前の所を、話を聞き付けたクシュルの尽力でロンドンに呼び寄せ、以来“アッカーマン荘”で共に暮らす事となった。

両親を失った心的外傷に加え英語に不慣れな事から、敢えて学校には通わず、現在自宅学習で様子を見ている。

一族の能力を受け継いだようで、霊的なモノを感知する事は出来るようだが、まだ幼いこともあり生きている人間と幽霊との区別を付けるには至っておらず“友達が出来た”と称し、自宅に子供の霊を連れ帰り周囲を慌てさせる一面を持つ。

Yankee Goes To London!

★ ナイル・ドーク — Nile Dok —

男手一つ子供を育てる隣家を見兼ねた母親が、何かに付け世話を焼いた事から、エルヴィンとは似ても似つかぬ双子のような幼少期を過ごす。ものの見事に幼稚園からハイスクールまで同じ経歴を歩むも、大学入学で漸く専攻だけは枝分かれした。青いライトセーバーに固執する相手に、嫌々ながらも自身は赤を買い求め敵役に回るなど、子供の頃からエルヴィンの我儘に散々付き合わされ、挙句級友からは不名誉にも“不憫”の二つ名で呼ばれようになる。

現実的かつ堅実な性格から、大学卒業後はウォール・ストリートにある大手投資会社に職を得たが、就職三年目にしてロンドン支店に飛ばされた。万年絶賛恋人募集中だが、最近では一足飛びに“嫁”を切望し婚活に余念がない。

★ ミケ・ザガリアス — Mike Zacharius —

スコッチ・ウィスキーの名門と頌される醸造所を営む一門の生まれ。製造方面は伯父が継いでおり、弟である父は流通と販売を手掛ける為ロンドンに置かれた会社を任されている。

アッカーマン一族がスコットランドに居留していた頃より代々愛飲されて来たことから両家の付き合いは長く深く、彼等の本業を熟知する間柄。霊的なモノの存在を認知しており、時に協力的な助っ人となる。中でも彼は、霊を嗅覚で察知出来る事から度々幽霊退治に駆り出され、そなりの場数を踏むに至った。

恵まれた体躯に先輩から目を付けられ、中等学校入学時よりラグビーを始め、卒業時にはプロリーグからスカウトを受けるが、持ち前の嗅覚を活かすべく、将来は伯父の跡を継ぎ醸造家になると定め、進学先にレディング大学の食品科学部を選ぶ。

★ ハンジ・ゾエ — Zoe Hange —

ギリシャで海運業を営む一家に生まれたが家業には一切関知していない。裕福な家庭であった事から、高校卒業まで一貫して私学に在籍。知能の発達が早く、両親の教育方針もあり好きな事だけを突き詰めるうちに生活能力が著しく低下。取り分け一般常識と家事全般が完璧に欠落する事になる。

より高度な教育を留学に求め渡英。イギリス国内の大学を幾つも見学した後、ロンドン大学キングス・カレッジに進む。

専攻は数化学だが、オカルト好きが高じ人文学や歴史学の分野で著名なユニヴァーシティ・カレッジに出没しては勝手に講義を受けている。本国の財政破綻により実家が傾き、仕送りが滞った事を切っ掛けに、趣味優先で選んだバイト先が偶然にもアッカーマン一族の経営するツアー会社だった。

★ モブリット・バーナー — Moblit Berner —

キングス・カレッジに在籍するハンジの後輩。グレートブリテン島南西部に位置するウェールズの出身で、球技と言えばフットボールより断然ラグビー派。その縁からミケと知り合い、アッカーマン家所有の物件を紹介され入居中だが、家賃滞納に加え共有スペースの汚部屋化で強制撤去を繰り返し、不動産業界のブラック・リスト殿堂入りを果たしたハンジにより度々自室を占拠されている。リヴァイ曰く根っからの苦勞人体質。

シティ・ツアー繁忙期には強力な助っ人として駆り出されており、責任感もあり真面目で几帳面な性格から利用者の人気も高い。ケルト神話が息衝く地に生まれた事からか、霊的なものに寛容であり、彼等が持つ“邪悪”と“善良”を本能的に理解している。

Yankee Goes To London!

★ ペトラ・ラル — Petra Ral —

ロンドンの下町イーストエンド出身。マイ・フェア・レディに憧れを懷き、コックニー訛りの矯正に執念を燃やしている。この地区出身の若者の多くが辿るように、義務教育を終えると同時に職に就いた。

ソーホーのカフェの店員や、ウェストフィールドに出店する靴屋の店員など幾つかの職を転々とする中、自宅近くの路地裏で偶然見掛けた“幽霊ツアー”に興味を持ち、主催元であるアッカーマン・ツアーズへ自ら赴きガイド役として売込む。

幼い頃祖母から聞かされた切り裂きジャックの逸話語りを披露し見事採用されて以来、見た目の可愛らしさに反したその棘々しい口上で人気を博している。数少ないフルタイムでの正規従業員である事から、社内での発言力は絶大を誇る。

★ オルオ・ボザド — Oluo Bozado —

フランス国内でも独特の文化を持ち、ブルターニュ・イストリックと呼ばれる地域圏の中で地理的に最もイギリスに近いフィニステールの出身。幼い頃よりケルト文化に強い興味を持ち、本場イギリスで学ぶ事に憧れるも、実家はそれなりの規模の農場を営んでおり、跡取りを期待され夢を手放しつつあった。

家業を継ぐ事を前提に大学進学を許される中、農業技術を相互に学ぶ事を目的としたイギリスの大学との交換留学生募集を知り、両親への大義名分を手に入れ即座に応募し合格する。

イーストエンドの実情を知らぬまま観光気分で訪れ、地元の若者に恐喝されている所を、ガイド中のリヴァイによって助け出される。以降心酔し日参を重ねた末、押し掛けバイトとしてバスツアーに使用するダブル・デッカーの運転手を務めている。

★ エルド・・ジン — Eld Jinn —

アッカーマン一族が経営する“幽霊パブ”の従業員で厨房担当。フランスから嫁いで来た祖母が、夫を亡くし子供を抱え途方に暮れる中、料理の腕を買われパブの厨房で働き始めた事を切っ掛けに一族との縁が生まれた。その後、高齢を理由に引退した彼女の跡を継ぎ今に至る。

幼少期より祖母の働き振りを見て影響を受け、中等教育修了試験合格後は料理人に成るべくフランスの調理学校に進学した。パブだけでなく、一族が経営するの他の飲食店のレシピを考案するなど、料理に関しては全幅の信頼を得ているが、残念な事にケニーの暴走を止められる程の腕力はない。その所為もあり、不本意ながら店ではすっかり“怒られ役”としての地位が定着しつつある。グンタとの付き合いは、通算二十年を越える。

★ グンタ・シュルツ — Gunther Schultz —

初等から中等教育時代に掛けエルドと同級であり、親友と呼び合う間柄であった事からアッカーマン一族と知己を得る。

中等教育の課外授業で訪れた大英博物館で、葛飾北斎の浮世絵を見て以来、日本文化に魅せられ、進学先として北斎を初めてイギリスに紹介した人物が過去学長を勤めた事もあるロンドン大学ユニバーシティ・カレッジの文学部を選ぶ。

現在は研究員として大学に席を起きながら、雑誌やインターネットで漫画やアニメ、ゲームを中心とした日本の最新ポップ・カルチャーに関する連載を持つなど、コラムニストとしても活動中。

日本人客への対応で助言を請われ、アッカーマン・ツアーズにも良く出入りしている。リヴァイの何処か偏った日本の情報は、大体がこの人物の影響。



Yankee Goes To London!

☆ ウーリ・レイス — Uri Reiss —

見聞を広める名目で旅に出たケニーが、海峡を渡り辿り着いた先の国ドイツで出会った幽霊。氏名を除き詳しい事は一切語ろうとしない。国境や海を越えるには生者の手引が必要だが、その不自由さえ除けば、勝手に何処へでも出入り出来る。

旅の友としてケニーと共にユーラシア大陸を一通りを巡り、果ては大西洋を横断。アメリカ大陸に上陸すると、南米数か国を経てメキシコから合衆国に入国。現地で手に入れたオンボロ車で気儘に東海岸を目指す中、アッカーマン一族に起こった異変を知らせ強引に帰国を促す。

互いに別れ難かったのか、誘われるままケニーに憑きロンドンへと遣って来た。礼儀を弁え知識も豊富なことから、一族を筆頭とする“見える派”の面々からは無害認定を受けている。

☆ ハンネス — Hannes —

ケニーが雇われ店長として働く幽霊パブ“飲んだくれ”の元祖店主。酒好きが高じ、貯蓄を全て注ぎ込み商売を始めるも、客に出す以上の量を自身で消費し経営は常に赤字。借金のカタに店を手放す寸前、不名誉極まりない不慮の事故で死亡する。店の行く末が気になるのか、将又飲み足りないのか… 死後もそのまま居座り続け、後を継いだ店主が仕入れた酒を片っ端から飲み干しては、客の目の前で空き瓶転がしに興じていた。イギリス人に幽霊好きが多いとは言え、酔い知らずの相手を経済的に務められる店主は少なく、アッカーマン家の前当主が店を所有するまで、持ち主の間を転々とする。ケニーとリヴァイによる物理的教育の賜物か、今では節度ある飲酒により“幽霊ツアー”のラストを華々しく飾る一役を担う。

☆ ファーラン・チャーチ — Fāran Chāchi —

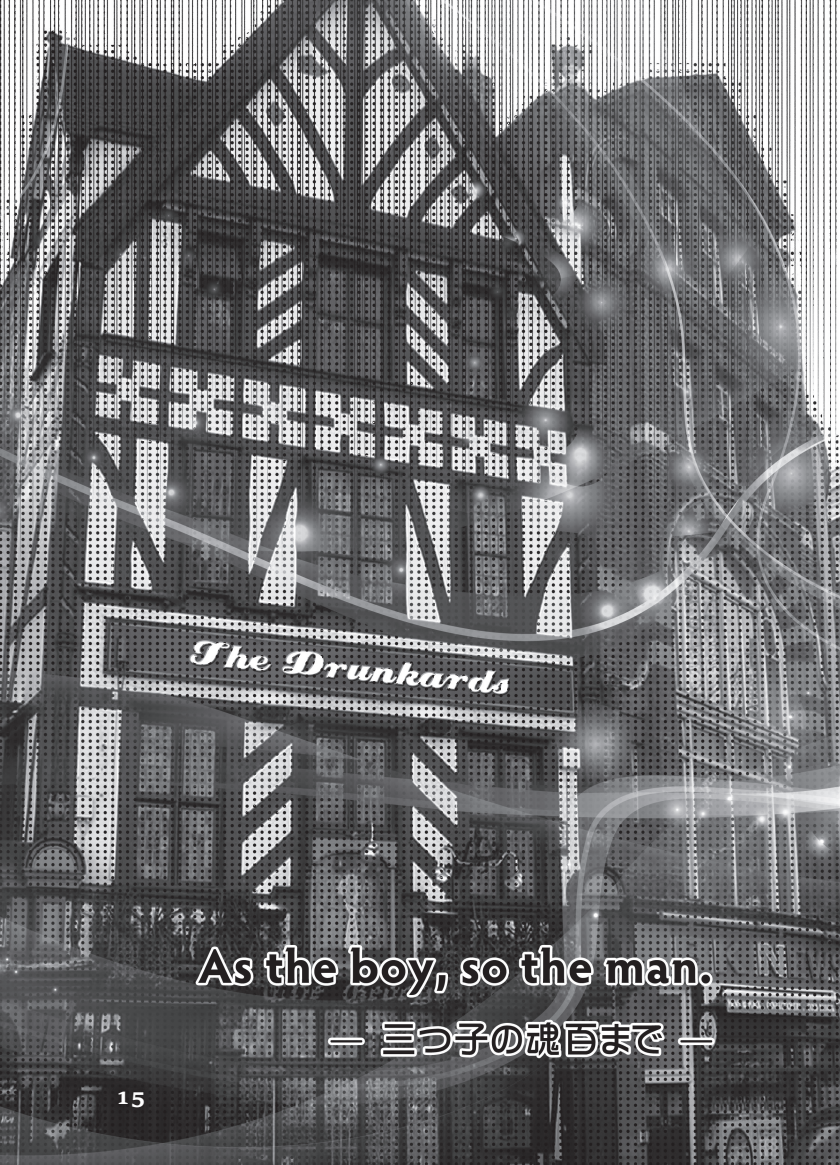
七十年代後半に“怒れる若者世代”の代弁者として活動していたパンク・ロック・バンドのボーカル兼ギタリスト。

自らの父親も含め、周囲の大人達の殆どが失業中と言う状況の中で育ち、その苛立ちを歌詞に込め、曲とは言えない未熟な音に載せる事で鬱積を晴らしていた。

斬新なファッションやスキャンダラスな私生活により、同世代の支持を得るも、逆にそのスタイルが仇となり、薬物の過剰摂取が原因で、カムデン・タウンにある宿泊先ホテルのバスルームで、死の二日後に遺体となって発見された。

仲間内のノリで“スリー・コードを覚えればギターは弾ける”を信条に音楽活動を始めた事もあり、ギターの腕前は初心者域を出ない。コード進行を覚え、メロディーを重視した曲を世に残したいと言う執念だけで、未だ此の世に留まっている。





The Drunkards

As the boy, so the man.

— 三つ子の魂百まで —

＋＊＋＊＋＊＋＊

— London Victoria St, London SW1E 5ND —

“エルヴィン・スミスは変わり者”

剃り残しのような薄ら髭を顎に蓄えた男は、迂闊にも舌先から溢れそうになった言葉を慌てて珈琲の助けを借り飲み込んだ。ハドソンズ・プレイスに面したソファ席を一人陣取るだけで否応なく目立つ。正直、今以上の悪目立ちはしたくない。

—『総じて彼奴の所為だ』—

待ち人である相手に責任転嫁を試みるも、約束の一時間も前に店に入った己の失態に跳ね返り、ナイルは努めて意識を切り替えた。

“イギリスと言えば紅茶。紅茶と言えばイギリス”半ば覚悟の上で渡英したあの頃の自分は一体何だったのか？丸テーブルに鎮座する特大サイズのカップを前に、それが刷込み以外の何物でもないと感じいた時の喜びを一人

噛み締め心を落ち着かせる。

尤も： 残念ながらその感覚に共鳴してくれるのは、同じく異邦人である一部のアメリカ人しか知らなかった。瞬く間に世界に羽ばたいたシアトル発のコーヒーチエーンだが、芳醇さに旨味を求める他の欧州出身の同僚には頗る不評を買っているのだ。

食に並々ならぬ拘りを持つとされるラテン系の連中はまだしも、ゲルマン系までもが、一目でそれと分かるカップを片手に出社する自分を揃って生温い哀れみの視線で迎えてくれる。そんな朝の儀式も、一年以上も続けば流石に耐性が付く。ただ、時折こうして一人時間を持て余す時に限り、決まって居心地の悪さが蘇るのだ。

『そう言えば、エルヴィンは紅茶党に鞍替えしてたんだったか…』

遠路遙々この地を訪れる同郷人との待ち合わせに、故郷の象徴とも言えるこの店を選ぶのが自分の中では最早習慣を飛び越え必然となっていたことにはたと気付く。

真珠婚式の記念と称し、初めての海外旅行先を赴任中の息子との縁から定

めた両親を筆頭に、挙ってイギリス国内限定の品に目を輝かせ土産にと買い求める姿を目の当たりにして優越感を抱かない訳がない。

何より普段は食器だの雑貨だのに到底興味を持ち得ない自分が、着任早々にして思わず買ってしまった程だ。イギリスを代表する文豪シェイクスピアの肖像がプリントされたマグカップは、今では抜け目なくすっかり愛用品の座に収まっている。想像すら絶する遠い昔に生きた偉人だが、時と海を遙かに越え、後にアメリカ合衆国と名乗る国の教科書にすら取り挙げられる程の影響力を持つのは確かだろう。

シェイクスピア作品など、大学時代数学的センスを求められる統計学寄りの経済を専攻した自分にとって、一般教養程度の意味しか成さない。後にも先にも、まともに対峙した経験は、ハイスクール二年目の終わりに出された英文学の課題で一度切りだ。それすらも“早く”“軽く”読めることを理由に『ベニスの商人』を選んだ程だった。

自分を含め同級生の大半が、放課後の図書館で感想と評論の違いに首を捻りレポート用紙の罫線を埋める作業に四苦八苦する中、唯一エルヴィン・ス



ミスだけが他者とは異なる反応を示していた。

一言で言えば、遙か彼方の異世界に一人旅立っていたのだ。良く晴れた日の昼空に喻えられる碧眼の瞳孔は完璧に開き、聴く者も居ぬ宙に向け繰り返し独り言を呟くその様は、今思い出しただけでも軽く身震いが起きる。

――金髪碧眼の王子様―― 当時のエルヴィンに与えられた賞賛は、彼と近付けば近付く程遠退く。一度でも同じクラスに収まった者なら、その理由を否応無く知る事となるのだ。クラス編成が行われる新学期。初めて彼と同じクラスになった女子から毎度繰り返される告白合戦も、一月も経てば彼女たちの恋心に挙って黒歴史を刻み平静に戻る。訳知り顔の連中は、一連のそれを覚えたての俗語で“様式美”と呼んでいた。

そんなエルヴィンを、ネズミ王国が増産するアニメ映画に擬え『観賞用』と命名したのは、自分と同じくジュニア・スクールから彼を知る赤毛に雀斑を携えた優等生の筆頭、当時のクラス委員長だ。

入学以来数多の同性を敵に回していたエルヴィンだが、その不名誉な命名が瞬く間に女生徒の間で拡散されるに従い、本人の預かり知らぬ所で敵認識

から百八十度転換し逆に憐憫を引き寄せるに至って行った。

そして： 遂にと言うべきか、成るべくしてと言うべきか。性差隈なく共通して彼を指し示す文節が新たに生まれた。それが『エルヴィン・スミスは変わり者』だ。

中でも、彼に対するその評価を決定付けたのが件の課題発表の場だった。

『ベニスの商人』と『ロミオとジュリエット』。性差の垣根で人気を二分するものの、課題に対する元ネタの大半はこの二つで占められていた。

方や倫理を養う教科書として子供向けの絵本に焼き直し出版され、幼少期より馴染みある作品。それに相対するは悲恋モノの代表格で、解釈を端折りつつも幾度か映画化までされた作品だ。

詰まる所： エルヴィンを除き自分を含む多数の学生は、手近な所から安直に慣れと親しみを俎上に載せたに過ぎない。しかし： 明らかに彼だけはその他大勢の学生とは異なっていた。発端となった教師とて例外なく“異彩を放つ”と言う言葉の真意を、その場に居合わせた誰もが体感しただろう。

発表の壇上に立たされた誰しもが、極度の緊張と理解の未熟を精一杯の修

辞で飾る中、エルヴィンだけは正に別格だった。王子から一足飛びで王座に就いたとでも言えいいのか……

一冊を読み通す事ですら——途中脱落し、レンタルビデオで済ませた強者も数多い——苦痛との戦いを強いられた同士を前に、与えられた課題に対する彼の答えは、事もあろうにシェイクスピアを代表する『四大悲劇』を纏めて論じるものだった。

その場に居合わせた級友の総意は、“悔しい”だの“負けた”だの負の感情を抱く以前に“うへへ”アイツマジかよ？”が総意だったと思う。

レポート用紙にして五冊を費やしエルヴィンが認めた『シェイクスピアの四大悲劇に於けるイギリス王政に対する暗喩』と題した評論は、課題を課した英文学の教師のみならず、聴衆として参加した他の教科を担当する教師からも拍手喝采を受けた。当時その学校で世界史を教えていたエルヴィンの父親など、身内最良を指摘する隙すら与えぬ程、一際派手に拍手を打ち鳴らしていたのを妙に覚えている。

それは……間違い無く自身が知るエルヴィン・スミス二度目の運命の瞬間

だったと思う。

それを証拠に、その後のエルヴィンは教師の覚え目出度く人文学系の授業では尽くAにプラスを3つ蓄え、優秀さを証明する成績表と大仰な推薦状を携えオマケに奨学金まで付け志望する大学へと進んだのだ。

手元のカップが温もりを失った所で気にするでもない。そもそもそんな繊細な神経を持ち合わせていれば、飲み切る前に味も風味もガタ落ちする特大サイズなど端から注文しないだろう。

久し振りの再会を前に箍が外れたのか、走馬灯のように過る記憶は留まることを知らない。自分とエルヴィンの関係は、間違っても“親友”に分類される類のものではないと断言出来る。だが、人生の大半を共に過ごして来た仲であることは疑いようのない事実だ。

其処に甘美な銘記は一切ない。寧ろ強い苦みや強烈な酸味を舌に乗せた時のような、名状しがたい感情が鮮明さを伴に従え威風堂々と蘇って来る。

二度目と言うからには当然一度目もある。そして：偶然その瞬間に居合